ひびき

ゆつま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひびき

【Ｎコード】
Ｎ３７２３Ｔ

【作者名】
ゆつま

【あらすじ】
暖かい妻と娘に囲まれ、平凡だが幸せな日々を送る主人公。
しかし、些細なきっかけから、その日常に波風が立ちはじめてしまう―

（前書き）

はじめまして。ゆつまという者です。
小説家を目指し、日々創作等に励んでいます。
今作「ひびき」は私の処女作となります。
それゆえに文法がめちゃくちゃだったり、誤字脱字等あるかもしれませんが、
その際はレビューなどでお教え頂けたら幸いです。
今後ともよろしくお願いします。

「それじゃ、行ってきます。」
俺は玄関に立つ妻の恵理子と娘の希実に声をかけた。
「行ってらっしゃ～い。」
二人の声が響き合う。
俺はそれを背中で受け止めながら、家を出た。

会社に着き、俺がデスクに座るなり、後輩の林田が声をかけてきた。
「先輩、希実ちゃんのお誕生日おめでとうございます！」
来週の日曜日は希実の誕生日だ。
「ははは、照れるな・・・。っていうか何でお前が希実の誕生日知ってるんだよ？」
「なんでって、先輩、希実ちゃんが生まれた日の翌日に、会社で言いまくってたじゃないですか。『娘が生まれたんだ』って。何回も何回も。あんまりしつこく聞かされたもんだから、俺もう誕生日覚えちゃったんですよ。」
「そ、そうだったけな、ははは・・・。」
俺はたまらず苦笑いした。
「そうですよ。休憩中でもお昼休みでも、ずっと『名前はどうしよう』とか『早く帰って顔が見たい』だとか、そんな話ばっかり。本当に親バカですよねぇ。」
そう言い放ったのは俺と林田のデスクにコーヒーカップを置いたOLの宮野さんだった。俺たちの話を立ち聞きしていたようだ。宮野さんが続ける。
「お誕生日おめでとうございます。希実ちゃんに伝えておいてくださいね。それと、誕生日以上に忘れられないのは、北山先輩のあのニヤニヤした顔ですよ。もうノロケまくり。子供ができて嬉しいのはわかりますが、あの親バカっぷりは、どうにかならなかったんで

しょうかね。」
彼女はハァーと深いため息をついた。俺は頭を掻きながら、ははっとまた苦笑いした。
確かに、あの日の俺はすこし、いやかなり親バカだっただろう。でも希実が生まれた日は俺と恵理子にとって本当に特別な日だった。
恵理子は生まれつき体が弱く、病気がちだった。実は希実が生まれる前に流産していて、その時恵理子は毎晩泣いていた。俺の前では気丈に振舞っても、強がってるのが手に取るようにわかった。なんとか励ましたかったが、何と言っていいのかわからなかった。「元気出せ」とか「頑張れ」なんて口が裂けても言えなかった。だって一番頑張っているのは、ほかでもない恵理子だったから。安易に言葉をかけては、恵理子を傷つけてしまうかもしれない。でもこのまま何もせず毎日を過ごすなんて、耐えられない。そんな思いが俺の中をめぐりめぐっていた。
でもある日、暗闇で何も見えなかった俺たちに、一筋の光が差し込んだ。
希実を授かったことだ。俺たちは抱き合い、泣いて喜んだ。希実が、俺たちのたったひとつの希望だったから。その後恵理子が体調を崩すことはなく、安定期に入った。
そして五月三十日、希実が産声をあげた。３６６２グラムの、いたって健康な赤ちゃんだった。唯一の希望だった俺たちの赤ちゃんは、『希望が実るように』で“希実”と名付けた。そして今、希実が生まれて５年が過ぎようとしている。

「ただいま・・・。」
俺は家のドアをそうっと開けた。電気は点いているが、リビングには誰もいなかった。ふと時計を見ると、午後十一時を過ぎようとしていた。
希実はもう寝ている時間だし、恵理子も希実を寝かすつもりが一緒に寝てしまったんだろう。俺は風呂に入り、その後缶ビールとつま

みを持ってきて一杯やった。夕食は外で済ませてしまった。今日は休肝日なのだが、口うるさい恵理子はいないし平気だろう。それに、酒で何もかも忘れたかった。俺は今日、会社で大きなヘマをやってしまった。部長には大目玉を喰らうし、同僚からは笑われ、もう散々だ。今日はおおいに酔って、何もかも忘れようと、缶ビールを飲み干した。もう一本冷蔵庫から取ってこようと膝を立てるが、足に力が入らない。大勢を崩し、フローリングに尻もちをついた。そう、俺は酒に弱い。すぐ顔が赤くなるし、眠くなるし、そもそも俺は酒があまり好きではない。こうなったらもう会社での失敗なんてどうでもよくなって、フラフラと寝室に向かった。

和室兼寝室の襖を開けると、二人は既に熟睡していた。甘えん坊の希実は、添い寝してもらわないと寝れないらしい。俺の予想通り、恵理子もそのまま寝てしまったようだ。Tシャツにジーパン、肘まで伸びている長い髪も、後ろでひとつに縛ったままだった。俺は希実の隣に寝転び、俺と恵理子で希実をはさむような形になった。すぐ隣にある希実の顔を見つめる。口は半開きで、よだれが垂れていた。俺はよだれを指で拭うと、頭をなでた。

愛しい希実。君が好きで、君が好きでたまらない。日本は不景気で、相変わらず首相は難しい顔をしてるけど、今ここにそれを持ってくる必要もないだろう。俺はただ、三人で歩いて行ければそれでいい。雨の日も風の日もあるんだろうけど・・・。そんなことを考えながら、俺は布団にもぐった。

朝起きてリビングに向かうと、恵理子がため息をつきながら空の缶ビールとつまみを片づけていた。しまった。片づけもせずそのまま寝てしまったんだ。それに休肝日であるにもかかわらず飲んでしまったのがバレバレだ。恵理子はこちらに気づくと、無愛想に「おはよう。」と声をかけてきた。答えないわけにもいかず、俺も「おはよう。」と返した。

「怒ってる・・・よな。」

俺がおそるおそる切り出した。
「別に。怒ってないよ。」
恵理子はこれまた無愛想に言った。嘘つけ、その口調からして怒っていないわけがない。それに「別に」なんてどこかの不機嫌な女優と同じじゃないか。・・・いや、今はそんなこと考えてる場合じゃない。とにかく謝ろうと思い、口を開きかけたその時、
「あなたって、いっつも先に謝ろうとするよね。」
俺より先に口を開いたのは恵理子だった。
「丸く収めようとしてペコペコ平謝り。『これからは気をつける』とか『もうやらない』なんて、心にも思ってないようなことばっかりじゃない。本当に反省してるの？」
確かに、俺は今までも休肝日にこっそり飲んだりしていた。希実が生まれたばかりの頃、「体に悪いから」といって恵理子にタバコをやめるよう言われたときも、こそこそ隠れて吸っていた。恵理子はそれを見つける度不機嫌になるので、俺は噴火する前にペコペコ頭を下げ、幾度となく彼女を鎮めてきた。
　でも俺には少なからず、「謝ればいいんだろう」という甘ったるい精神があったのかもしれない。その証拠に、俺は性懲りもなくそれを繰り返し、恵理子を何度も不機嫌にさせた。恵理子は怒っている、というより呆れているんだろうな、きっと。
　しかし今日のいつもとは違う恵理子の言葉に、俺の「謝ればいいだろう」精神は、音をたてて崩れた。恵理子の言葉は的を得ていた。でも気をつけよう、と思ったのは本当だし、ちゃんと反省もしていた。何もそんなに言う必要はないじゃないか。そのいら立ちに加え、昨日の会社での失敗がストレスを呼び、俺の辞書にはもう、「理性」という言葉は消え去り、口が勝手に動いた。
「何が悪いんだ？自分の家なんだから好きなときに酒飲んだっていいじゃねぇか！俺は会社で疲れてるんだ。上司には怒鳴られ、同僚からは笑われ、もうたくさんだ！それに家事は妻の仕事だろ？片づけて当たり前なんだよ！」

頭の中はぐちゃぐちゃで、もう収拾がつかなかった。
その瞬間、
『パンッ』
乾いた音がリビングに響いた。一瞬、何が起きたのかわからなかった。恵理子の右手は、俺の左ほほをしっかり捕えていた。そして彼女は何も言わず、キッチンへと消えていった。
俺は、何かとんでもないことをやらかしてしまったような気持ちになった。

「おはようございます。」
会社に出勤すると、林田があいさつしてきた。
「あぁ、おはよう。」
俺は弱々しく答えた。
「あれ、先輩元気ないですね。どうかしました?・・・あ、奥さんとケンカでもしたんですか?」
おちょくっているのだろうか、俺の顔を見ながらニヤニヤしている。図星だなんて、こいつは夢にも思ってないだろう。
「どうかしたんですか、北山さん。そんな暗い顔をされると、こっちまで鬱になりそうですよ。」
そう言いながら、宮野さんは俺に淹れたてのコーヒーを持ってきた。
俺はありがとう、と言うとコーヒーを啜った。今日は朝から雨で体が冷えていたので、温かいコーヒーはありがたかった。
「はは、ごめんごめん。実はさ・・・。」
俺は今日の朝からここに至るまでの経緯を話した。

「そうだったんですか。」
俺が話し終わって最初に口を開いたのは宮野さんだった。林田は真面目な顔ですいません、と俺に謝った。
「女性として意見を言わせて頂きますと、北山さん、あなたが悪い

です。
休肝日なのに勝手に飲んで、片づけもしない。しかも度々となると、奥さんも呆れますよ。それに『家事は妻の仕事』なんて、男女差別もいいところです。そう言いたくなる気持ちもわかります。」
俺も本当に悪いことをしたと思っている。あの時はついカッとなってしまったが、冷静に考えれば悪いのは俺だ。
「で、どうするんですか、この後。」
宮野さんが追及する。
「どうするって、謝るしかないだろ。でも・・・。」
俺が躊躇う理由は、恵理子に平手打ちをされた後にあった。
あの後恵理子は普段通り朝食をつくり、食卓に運んだ。俺はその時イライラしていたから、恵理子の顔を見るのが嫌で、できれば外で済ませたかったのだが、今月の小遣いはあとわずかだった。俺は仕方なく食卓の椅子に座った。希実も起きてきて、三人で朝食を摂った。
いつもと変わらない、日常的な光景。ただひとつ違ったのは、会話が全くなかったことだ。
いつもなら会社での失敗談、幼稚園での出来事、園児のお母さん集会で得た情報なんかを笑顔を交えて楽しく話すのだが、今日は違った。普段からテレビを見ない恵理子が、今日はニュースを見ていた。俺がテレビっ子なので、２０１１年にむけて地デジ対応のテレビを買ったが、恵理子は一人暮らしだったら、アナログ放送の終了とともにテレビとおさらばする予定だったらしい。そのくらいテレビを見ない恵理子が、今日に限って見ていた。アナウンサーがニュースを伝えているが、頭には何一つ入ってこない。まさにここが『事件現場』だった。
緊迫した空気の中、何も知らない希実だけは本当に“いつも通り”だった。そして俺が「行ってきます。」というと、必ず返ってくる二人の「いってらっしゃい。」そんなやりとりもどこかへ飛んで行ってしまったようだ。この重たい空気の中で、話を切り出すのは困

難だと思った。
　そしてもう一つ、俺は何度も何度も謝ってきて、「もうしない」と約束をして、それをまた破って。また謝って・・・。このループができてしまったせいで、俺が何を言っても信じてもらえないような気がするのだ。
　まるで本当にオオカミが来ても、誰にも信じてもらえなかった『オオカミ少年』のように。

　そして土曜日を迎えた。希実の誕生日はもうすぐそこなのに、何も進展はなかった。
　いつもならプレゼントのリクエストに応えるため、おもちゃ屋に恵理子と足を運んでいるはずなのに、どうしたらいいのだろうか。『早く謝れ』と言われればそれでおしまいなのだが、ここで謝ったら恵理子を逆に怒らせてしまうかもしれない。こっちが悪いことは十分わかっているのに、話がうまく切り出せない。そして今週に限って仕事が忙しく、なかなか顔を会わせられなかった。
　誰か教えてくれないだろうか、この壁の登り方。

　俺が考えあぐねているうちに時間は過ぎ、夜の１２時をまわっていた。
二人はすでに寝ていた。今日は休肝日ではないのだが、最近体の調子が悪く、飲む気にはなれなかった。それなら早く寝ればいいだけの話だが、どうも寝付けない。布団に入って寝ようとしても、目がさえて眠れない。そんなことが何日か続いている。
　今日も同じく眠れないので、ぼうっとテレビを見ていたら、ふいに声がした。
「パパぁ・・・。」
声のするほうを見ると、希実が玄関へ出るドアの近くに立っていた。
「どうした？希実。寝てたんじゃなかったのか？」
希実は首を横にふった。あれ、希実は寝ていなかったのか。じゃあ

今まで何を・・・。
「のぞみね、ママがねるまでまってたの。おそくまでおきてると、ママにしかられちゃうから・・・。のぞみ、パパに“おまじない”してあげる！」
　希実はそう言うと、ピンク色のペンを持ってきた。
「パパ、おててみせて。」
俺は言われるがまま右の手のひらを差し出した。一体なにをするつもりなのだろうか。
　希実は持ってきたペンのキャップをはずし、俺の手のひらにハートマークを描いた。ハートマークは不格好で、それだとわかるのにちょっと時間がかかった。希実は左の手のひらにも同じことをした。
「それでね、おててをあわせて『エテルニタ』って3かいいうの。」
そう言うと、希実は胸の前で両手を恋人つなぎのように握ってみせた。
少し恥ずかしかったが、俺も同じように手を握り、「エテルニタ」と3回言った。大の大人がおまじないって・・・。希実は何を考えてるんだろうか。
「それはね、すきなひととずっとずっといっしょにいられますようにっていうおまじないだよ。ゆいちゃんがおしえてくれたの。」
希実の言葉に、俺は目を見開いた。彼女は俺と恵理子がケンカしてるの、知っているのだろうか。いや、ただ最近おまじないを教えてもらって、俺にやらせたかっただけかもしれない。
　俺がそんなことを考えているとも知らず、希実は寝室に戻っていった。
俺もそれにつられるように、テレビを消して寝室に向かった。襖を開けると、希実はすでに布団に入っていた。恵理子はケンカする前の日と同じように、希実の布団の横で熟睡していた。恵理子の寝顔を見て、俺はふと思った。
　なぜケンカしてしまったんだろうか。なぜあの時、あんなことを言ってしまったんだろうか。俺が悪いことは、十分わかってたはず

なのに。俺がもっと冷静になっていたら、こんなことは避けられていたはずなのに。
両手に描かれたハートマークを見て、俺は強く誓った。明日、仲直りしよう。

朝起きてリビングに行くと、恵理子は朝食の支度をしていた。俺はテレビを消し、二、三度深呼吸をしてから、
「おはよう。」
と恵理子に声をかけた。
「おはよう。」
恵理子はケンカした日と同じ、無愛想な返し方をした。
そして、訪れる沈黙―
「あのさ。」
を、俺が破った。
「なんでこんなことになったのか、あの日からじっくり考えてみたんだよ。後輩とかにも話してさ。でもいくら考えても、答えは同じだった。
俺は自分のことしか頭になかった。恵理子の気持ちなんて、これっぽっちも考えてなかった。またいつもと同じか、なんて思われるかもしれないけど、これ以外思いつかないんだ。俺は詩人でもなんでもないし、ましてや格好つけられるほど器用じゃない。」
・・・この言葉を言ったら、どうなるだろうか。
『そんな言葉聞きあきた』なんて愛想尽かされて、実家に帰る、なんてことにもなりかねない。でも、俺にはこの方法しか思いつかない。
両手に描かれたピンク色のハートマークに目をやる。そして恵理子をまっすぐ見つめる。
「ごめん。本当にごめん。」
静かなリビングに響いた俺の声。そして訪れた沈黙―。恵理子は遠くを見るような目をして、ため息をついた。

・・・そんな。予期していたことが起きてしまったのか。俺は呆然と立ち尽くす。俺はもう、どうすれば―

「あなたって、いっつもそうよね。」

恵理子の唇が動いた。

「自分のことしか頭にないし、わがままだし、人の気持ちなんてぜんっぜん考えてないし、休肝日にお酒は飲むし、片づけもしないし、私がタバコやめてって言っても聞かないし。なんであなたと結婚したんだろう、ほかにいい人なんてたくさんいるのにって、ケンカするたび思ってた。」

恵理子の口元が少しだけ緩む。

「でも、いつでも先に謝ってたのはあなただった。まぁ、私が爆発しないうちに謝ればいい、な～んて思いもあったんだろうけど。」

図星だった。女性という生き物はなんてカンが鋭いんだろうか。

「寝る前嫌なことがあって、ちょっとイライラしてたの。それで朝起きたらあの状態。もう嫌になっちゃって、謝ろうとするあなたにいじわるしちゃったの。そしたら怒鳴るんだもん、私もう爆発して、あなたをぶった、ってわけ。よくよく考えたら一家の大黒柱を平手打ちなんて、とんでもないことしちゃったんだけどね。だからあなたが会社に行った後はもうドキドキよ。離婚届渡されて、『サインしてくれ』なんて言われるんじゃないかと思って。あんな思いはもう嫌よ。・・・だから、私も謝る。ごめんなさい。」

そうか、恵理子も同じ思いでいたのか。俺は恵理子の気持ちをわかってやれなかった・・・。そんな自責の念が心に広がり、とても後悔した。

俺は恵理子のそばまで歩み寄り、強く抱きしめた。ごめんな、恵理子。もうそんな想い、させたりしない。いつだって、どこだって、君を守り続ける―。

そう強く誓ったとき、ふいに小さな足音が聞こえた。そうか、希実が起きてきたんだ。俺は恵理子から離れると、おはようと希実に声をかけた。

希実は俺たちのほうに駆けより、
「パパとママ、ずっとずうっとなかよしさん！」
・・・やっぱり、希実はなんでもお見通しなんだな。

真っ赤なイチゴがのったホールケーキに、ろうそくを5本立てた。
俺はその5本のろうそくに、ライターで火をつける。
この日を迎えるまでいろいろあったなぁ。俺はそんなことを考えながら、手のひらの少し薄くなったハートマークに目をやる。
「パパ、どうしたの？はやくつけて。」
希実に催促され、俺は火をつけた。恵理子が灯りを消し、準備は整った。
「ハッピバースデートゥーユ～」
重なった声は、暗い部屋に響き渡った。

ＥＮＤ

（後書き）

いかがだったでしょうか。
我ながらもう少しうまく書けなかったのかなぁと後悔する面もありますが（笑）
ここまでお付き合い、ありがとうございました！
次回作でまたお会いできたら光栄です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3723t/

ひびき

2011年5月19日09時38分発行